

やさしい解説

AIT通信

Accounting Information Technology

2007年(平成19年)10月創刊
第43号 平成23年4月号

厳冬も乗り越之
春の吹雪は
遠からず



発行



有限会社エーアイティ研究所

〒969-1169

福島県本宮市本宮字小原田 200 番地 2

TEL 0243-33-5538 FAX 0243-33-4467

URL <http://www.motomiya-mcs.jp/ait/>

E-Mail info@motomiya-mcs.jp

インターネット 新世代WEBサービスの活躍

3月11日の東北関東大震災は東北地方太平洋側と茨城県を中心に多数の犠牲者が出る大災害となりました。電気・ガス・水道のライフラインが絶たれ、電話等の情報インフラも繋がりにくくなるなど想像を絶する状況下に置かれました。携帯電話やスマートフォンは通話こそ繋がりにくくなったものの、メールやインターネットは比較の利用が可能な状態で、安否確認に役に立ちました。そしてその中でも、ここ一年くらいの間に注目された新世代のWEBサービスが情報源としてとても役に立ちました。

Twitter ～140文字のつぶやきのチカラ～

Twitter (ツイッター) は「ツイート (つぶやき)」と呼ばれる140文字までの短い文章を投稿、閲覧するソーシャル・ネットワーキング・サービスです。“ミニブログ/マイクロブログ”と紹介されることもあります。

Twitterの最大の特徴は情報伝達の即時性と伝播の広さであると言えます。Twitterでは基本的に自分がフォローしている人のツイート



<140文字のつぶやき Twitter>

だけが読めますが、他人のツイートを「リツイート」(「公式RT」や単に「RT」と呼ばれます)することで、自分のフォロワーに向けてそのツイートを転載することが出来ます。このようにリツイートにより転載が繰り返されることで重要な情報が広がっていくことになります。

震災時にはリツイートによって貴重で重要な情報が転載され広がっていきました。官公庁の発表や会見内容、各メディア(新聞社、テレビ局、ラジオ局)からの情報、安否確認、身近なスーパー・飲食店の店舗情報、被災者に対するアドバイスや励ましなど、実に幅広く様々な情報が広がっていきました。

今回の震災を機に、東京電力、陸上自衛隊なども広報用の公式アカウントを開設し情報提供を始めました。また、ミュージシャンの間でTwitterを通してチャリティの輪が広がり、チャリティイベントが各地で催されるなどしました。

このようにしてTwitterは被災者にとって重要な情報源として一目置かれる情報メディアになりました。

USTREAM ～誰でも簡単に生放送～

今回の震災でTwitterと共にクローズアップされたのがUSTREAMです。USTREAMは誰でも簡単に動画配信が行えるビデオ・ストリーミング・サービスです。パソコン、カメラ、マイクとインターネットに接続できる環境さえあれば全世界に向けて生放送の配信が行えます。「iPhoneやスマートフォンが一つあればそれだけで動画配信が可能である」と言い換えれば、どれほど簡単なのが理解できるでしょう。

また、放送を録画し保存することも可能で、生放送では視聴することができなかった人に再放送として視聴してもらうことも可能です。

震災直後には、NHKが放送をそのままUSTREAMで配信したり、テレビでは放送しきれない各種会見を中継配信したりするなど、重要な役割を果たしました。

被災地ではラジオが重要な情報源でした。ラジオ局では震災関連の特別編成でライフライン・避難所・安否情報などの放送を行いました。ラジオ福島、ふくしまFMはUSTREAMに公式チャンネルを開設し、放送をそのまま配信するという試みを行いました。USTREAMで配信することで、県外の方々にも福島県の状況を知ってもらうことが可能となりました。



<ラジオ福島のUSTREAM公式チャンネル>

その他にも、Facebookが安否確認や被災者支援に活用されています。また、GoogleやYahoo! JAPAN、民間/個人の有志が安否情報、避難所情報、義援金受付など震災関連情報を探しやすいように取りまとめたサイトを立ち上げるなど、インターネットを活用した被災者支援の輪が広がっています。

IT技術はどんどん発達しています。技術は人によって活用されることでその価値をより高めていくのだと、あらためて感じました。

編集後記 3月11日の東北関東大震災にて被害を受けられた皆さまに謹んでお見舞いを申し上げます。地震、津波のみならず、福島県では東京電力原子力発電所により多大な被害を被っています。被災地や福島県を支援しようと世界各国の様々な方が行動を起こしてくれています。とてもうれしく思います。また、この震災を機に多くのことを経験学びました。この経験を活かし、今後役に立てていかなければならないと強く思います。(本田)